「さぁ、ＧＵＮ×ＧＵＮ行こうぜ」

叫べ！

「なぁ…、これは流石にやり過ぎじゃないか、颯火？」

「ああ、何か一線超えちゃった気がするぜ、葬屋」

力ない声でそんな掛け合いをしながら、二人は目の前に広がる瓦礫の山をぼんやりと眺めた。創立から五十年間この地にあった我が校の成れの果て、まさに木っ端微塵。空虚な風が灰色の埃を舞い上げる。

「俺としては、颯火、お前の《陸海崩壊》が悪かったと思うんだが」

「いやいや、俺は手前の《万物よ、宇宙に散れ》が止どめとなったと主張したい」

「はァ？　お前、責任転嫁も大概にしろよ」

「奇遇だな。俺も手前に対して同じことを思ってた」

「死ね！」

「去ね！」

「貴様らいい加減にしろおおおおおッ！」

瓦礫の中から鬼の形相のいかつい男が這い出してきて叫んだ。

「喧嘩で校舎を壊すとかふざけてんじゃねぇぞッ！　度がすぎるんだよ貴様らッ！」

「いや、俺は悪くねぇよ、阿部教官。葬屋が空気を読まないでバイオレンスな言弾使うからいけねぇんだよ！」

「こんな頭に脳味噌は言ってる川からない奴の言うことなんて信じないでください、教官。元はと言えば颯火が吹っ掛けてきたんですから」

「手前からだろ」

「お前からだろ」

「成仏！」

「逝去！」

「喧嘩両成敗だ阿呆共がっ！　貴様ら二人で悪言の処理にでも行って来い！　当分ここに帰ってくんなッ！」

「「またですかァ！？」」

阿部の言葉に死刑判決を受けたかのように愕然とする二人。そんな二人に、阿部は額に青筋を張り付けながら、黒光りする銃口を向けた。

「文句も苦情も受け付けん！　《即刻彼方へ消え失せちまえ悪餓鬼ども》！」

パァン、と銃声は高らかに、灰色にけぶる空を貫いた。

И

言弾遣い。

言葉に宿る力、即ち言霊を銃弾に込め、戦う者の総称である。

ここ、言葉の国は他国に比べて言霊の力が高いため、各地に言弾遣い育成学校が多数存在している。その内の一つ、プレイネ地区第八言弾専門学校が、ある日、たった二人の生徒によって破壊された。

原因、喧嘩の流れ弾。

「だからって島流しはないだろ…」

「というより山流しって感じじゃないか、これは」

木々生い茂る鬱蒼とした森の中に二人の少年が仰向けに倒れていた。一人はモスグリーンのブレザーを羽織った目付きの悪い少年、弔祇葬屋。そして、もう一人は『撃』とプリントされたＴシャツに学ランを引っ掛け、長い前髪を大きなピンで止めた少年、

悼颯火(いたみそうか)。
学校を大破した、例の二人である。
「手前の所為だぞ。俺がここで遭難して死んだら責任とってくれよなー」
「死ぬなら勝手に一人で死んでろよ」
「ふ、馬鹿だなぁ。俺が一人で死ぬわけないだろ？　手前も道連れにしてやるっ！　シナバモロトモ！」
「……ハァ」
「おい！　ちょ、待てェ！　全速力で立ち去るな馬鹿野郎ォオッ！」
と、山の中でも元気すぎる二人は幼馴染である。そのため何かと気が合い良くつるんでいるのだが、事あるごとに罵詈雑言の応酬を繰り広げ、やがて言弾による喧嘩となり、終いには今回のように校舎を破壊してしまうという、仲が良いのか悪いのか良く分からない二人組である。
…ただ、厄介な生徒である事は間違いないだろう。
「だけどよォ、これは冗談じゃなくヤバいんじゃないか？　ここどこだよ。うっかり遭難とかしたら本当に死ぬんじゃないか？」
そうなんだよなー、と言いながら、ふと葬屋は足を止めた。
「まぁ、あの阿鼻叫喚と呼ばれる鬼教官な阿部も流石に生徒を死にいたらしめるなんて非道いことはやらねぇだろ…、ん、葬屋？　どうかし…」
「《澱みは全て闇に還れ》ッ！」
「うっわ！」
ダンッ！と、葬屋が背負っていたライフルが吠え、颯火はビクっと肩を震わせた。
同時に、硝煙が立ち上ぼる銃口が見据えるほの暗い森の中で、黒い影が揺らいだ。
「チッ…、悪言かよ…」
「来るぞ、颯火っ！」

『ギィイアアッ』
影=悪言が汚らしい叫びをあげながら、二人に襲いかかってきた。
悪言(あこ)。
人の陰口や悪口等の負の言霊の塊。いわば悪霊の様なものであり、彼らを狩るのも言弾遣いの仕事の一つである。
「教官が俺達をココに飛ばしたのは、これの所為か」
「ったく、俺達はただの見習い言弾遣いだっていうのによぉ…」
颯火はそう言って、両腰のホルスターから銃を抜き、その銃口を悪言に向けた。
「さ、戦闘開始(イッツァショータイム)だ！」
ガン！　ダン！
二つの銃声がはじけ、悪霊は叫びをあげながら勢いよく吹っ飛んだ。
颯火は悪言が体勢を立て直す前に一気に距離をつめ、至近距離から弾丸を打ち込む。
火花が散り、銃声が弾ける。
『ギィイイイッ』
「遅ぇんだよッ！」
弾弾弾弾弾弾弾弾弾弾(ダダダダダダダダ)！
リズミカルに銃声が鬱蒼とした森の中に響く。
そして、銃声の二重奏がやんだ頃には、蜂の巣となった悪言は砂のように消えてしまった。
それを見届けると、颯火は拳銃をホルスターにやりきった男の顔で爽やかに言う。
「ふー、雑魚の相手は疲れるなー」
「馬ッ鹿！　伏せろっ！！」
「はァ？　何ぐぼっ！？」
葬屋のライフルが颯火の頭に直撃する。次の瞬間、黒く長い悪言の爪が颯火の頭を

かすった。
「まだいんのかよ…、めんどくせぇなぁ！」
「《千の剣が闇を裂き》《億の刃が影を斬る》！」
バララララララ！
葬屋のライフルから勢いよく飛び出した言弾が、横合いから現れた数匹の悪言を貫いていく。
「お前弾切れだろ？　早く装填しろ！」
「わぁってるよ」
引き金を引いたまま言う葬屋に颯火は気怠そうに答え、拳銃を握り直した。
「レフタ《万針創痍（まんしんそうい）》、ライティ《二兆拳銃（にちょうけんじゅう）》、装填っ！」
颯火の叫びに合わせて両手の銃が光に包まれる。手の中で銃を回して握り直し、颯火は構える。
「爆ぜろッ！」
爆発のように重たい銃声がして、また一つ悪言を消し去った。一方で葬屋のライフルが圧倒的な数の暴力で悪言を狩って行く。
強力な言弾を駆使した的確な射撃。そして、並外れたチームワーク。
絶え間なく響く銃声に合わせて踊るように、二人は悪言を退治していく。
彼らは一人だけでは少し腕がたつという程度の言弾遣いだろう。しかし、互いの欠点をフォローしあうことで、人並みならぬ実力を発揮できるのだ。
そう…、友情☆パワーが彼らを強くするのだっ！
「っ痛ぁ！　颯火ァ、俺に当てるなって何回言えば分かるんだよ！」
「はァ？　そっちこそ、何回俺の射程内に入って来るなって言えば理解してくださるんですかーァ？　手前はライフルなんだからもっと下がってろっ！」
「今は敵が多いから、俺が掃射したあとお前が突っ込んだ方が楽に決まってるだろ！」
「手前の尻拭いなんてツマんねぇよーっ！」
「つまるつまらないで物事を判断するんじゃねぇ！」
「愚鈍スナイパーは黙ってろッ！」
「何だと！？　無計画ガンナーに言われたくねぇよ！」
……友情パワーかどうかはさておき、そんな風に口論しつつ周囲から際限なく現れる悪言らを打ち抜く二人。
音声さえオフにすれば最強コンビに見えるのに。
「へっぽこ葬屋！」
「おたんこ颯火！」
「カス！」
「クズ！」
『ギィイアア』
「「黙れ！」」
ズバン！
全く同時に放たれた言弾が悪言をあの世へ葬った。互いに罵声を浴びせながらも息はぴったりである。
仲が良いのか、悪いのか。
「にしてもよォ、キリがねェな…」
「どこから沸いてきてるんだよ…」
颯火と葬屋はそう言いながら言弾を放ち続ける。しかし、彼らの回りにはたくさんの悪言がひしめきあい、撃てども打てども悪言の数は一向に減る気配を見せず、むしろ増えていく一方である。たとえ雑魚と言えど、ここまで量が多いと辛いものがある。
「雑魚のくせに生意気なァああ！」
「あー、逃げ道作っとくんだったなぁー」

「どうにかしろよ」
「できるわけないだろ」
「無能！」
「低能！」
と、その時、
りぃいいいん――
透き通った鐘の音が空気を震わせた。その音源、ガラスの鐘を持って現れた少女は、大量の悪言を見据え、歌うように唱える。
「…《エマタリエカヘリモ》《エマタリエカヘリモ》《ンラムウホバクナモサ》」
りぃいいいん――
鐘の音がもう一度響いて、悪言は闇の中に溶けるように消えてしまった。少女は溜め息を一つ落として、呆然とする葬屋と颯火に視線を移した。
「あなた達大丈夫？　この森は悪言が大量発生して進入禁止になってるのよ。掲示、見なかった？」
「（阿部…ッ、あいつ生徒（俺たち）をそんなところに送ったのかよッ！）」
二人は小声で悪態をつくが、校舎を破壊したのだからあまり文句は言えない気がする。自業自得。
「…急に怖い顔しないでよ。…で、何やってたの？」
「ん？　まぁ、その大量発生した悪言を退治してたわけだが…」
「数が多くて困っていたんだ。だから、助かった」
颯火と葬屋が順に礼を言うと、いいのよ、と少女は笑った。
「悪言があんまりにも酷いから、最近は私みたいな逆言（さかごと）遣い見習いが悪言を祓って回ってるの。偶然あなた達に出会って良かったわ」
逆言遣い。悪言を言弾で退治する言弾遣いとは対照的に、悪言を、言霊をこめた言の葉、言魂で祓う者のことである。言魂に心を乗せて、悪言とコミュニケーションをとり、暴力ではなく話し合いで解決するのだ。
そんな逆言遣いはラングアゲから遠く離れた思いやりの国（キンディネス）に多くいるという。つまり、この森はキンディネスにある可能性が高い。
チュートリアル終了。
もっとも、二人は自分が遠征させられたということより、少女の一言に疑問を感じているようだが。
葬屋は眉をひそめながら少女に問う。
「必要ない？　どういうことだ？」
「え？　あなた達はラングアゲから来た言弾遣いだよね？」
「ああ、そうだともっ！　プレイネ地区第八言弾専門学校の弾幕ハリケーン☆颯火と葬屋とは俺たちのこと…」
「《嘘吐きは舌を裂け》ぇえッ！」
ばきゅーん。
葬屋の言弾によるツッコミが炸裂した。
「……デマは止めような、颯火ァ？」
「ごめんなさい、葬屋さん。謝るからそのライフルを降ろしてくれないかなそれは流石に死ぬからァア！」
素で馬鹿な寸劇を繰り広げる二人に、少女は笑いを堪えながら言う。
「私達の村が、ラングアゲの方に言弾遣いを送ってもらうように頼んでいたのよ。今まで『遠いから無理、そちらで解決してください』の一点張りだったんだけど、やっと重い腰をあげてくれたみたいね！」
「……ということはどういうことだ、葬屋？」
「▼俺たちは教官に面倒な仕事を押しつけられたようだ」

「阿部マジでくたばれぇえええええっ！」
そんな二人の壮絶に鬱な表情を軽くスルーして、逆言遣いの少女は爽やかに言った。
「ようこそ言弾遣いさん達！私は栖楽歌凛（すらがりん）。歓迎するわ！」
笑顔が、眩しい。

И

「というわけで、森の悪言退治よろしくね？　大丈夫、私も協力するから」
栖楽歌家、居間。元気の良い凛の言葉に颯火は満面の笑み。
「おい、葬屋！　俺たちさながら救世主（メシア）だぜ！」
「うれしいか？」
「それが全く！」
爽やか過ぎる笑顔で即答。
先に待ち受けるエンドレス悪言地獄を思えば、そうなるだろう。
「あれ？　リン、それはお客さん？」
と、二人の顔色が残念なことになっていると、別の部屋から出てきた小柄な少年が凛に問うた。
「あ、コト。この人達はラングアゲから来てくれた言弾遣いよ。弔祇さん、悼さん、こっちは私の幼馴染の頼乃琴樹（よりのことき）」
「どうも。そっか、言弾遣いかぁ…！　僕はもう来ないとばっかり…」
「私もそう思っていたけど、実際来たじゃない！　これで夜な夜な森の中を見回ったりしなくてすむわよ！」
「そうだよね！　言弾遣いさん、わざわざ遠方までありがとうございます！　あ、ぼ、僕に出来ることなら何でもしますから、その、頑張ってくださいっ！」
「（どうしよう颯火…、俺、この子達にものすごく謝りたくなってきた…）」
「（分かるよ葬屋、俺も何だか泣きそうだもん）」
村人少年少女の期待に溢れた言葉に、ものすごく罪悪感を感じる二人。
すいません、僕達ただ校舎壊して飛ばされてきただけですごめんなさい。
「そういうことだから、頑張ってね！　村人みんな、あなた達が悪言を退治してくれるって、期待してるわ！」
いや、マジすみません。

そして、気がついたら一週間の時が過ぎていた。
「俺もうラングアゲに帰りたいぜコノヤロおおおッ！」
「なんだよこの悪言の量！　いじめかよ！いじめなのかよ畜生ッ！」
バララララララララララ！
ズガドゴバキュンっ！
軽快に鳴り続ける銃声。群がる悪言を吹き飛ばしていく言弾。全部七回目。
「悪言って一箇所にこんなにあつまるモンだったっけ？！」
「皆、相当ストレスたまってるとしか思えないな！」
「ああ、もう、次から次へと苛々するなァ！　葬屋、アレやろうぜ！」
「まぁ、ただ単にやっててもつまらないしな。了解だ、颯火」
互いにうなずきあった二人は、大量の悪言の中心で背中合わせに銃を構える。
「よし、テーマコンボ、行くぞっ！　《くさい台詞しりとり》っ！」
言弾は同じような言霊を連続して使用すると威力が上がっていくことをテーマコンボという。そして、くさい台詞しりとりとは…
「イヤだ！こんなところで死ぬなんて…っ！　俺は、俺は死んだあいつのためにも…生きなければならないん『だ』！」

『誰も一人では生きていけない…、家族、友達、いや、すべての人間が互いに支えあって生きているんだ…そうだ『ろ』？」
「ローリア、僕は君を必ず助ける！待っていてく『れ』！」
「歴史に記された惨劇を、俺たちはまた繰り返すのか！？　民よ！　今こそ立ち上がるのだ！剣を取り、我に続『け』！」
「けっ、お前に俺達が倒せるわけないさ。人を思いやることを知らないお前が、絆で硬く結ばれた俺達を超えられるか『よ』！」
「よろこんで、あなたの盾になりましょう。どこまでも着いていきま『す』」
…と言ったように、日常会話の中で使うには胡散臭かったり痛い感じの言葉でしりとりをするものである。語彙力と想像力、その二つが試される高度な遊戯だ。
台詞とともに放たれる銃弾は容赦なく悪言を貫く。しりとりがすすむごとにその威力はましていき、一発で何十匹もの悪言を霧散させていく。
「ああ、私達、何であのとき出会ってしまったのかしら…そうでなければ…、っあなたはこん『な』…！」
「泣かないで、シリカ…。僕は、君と出会えてよかったと思ってる『よ』…」
「ヨレイヌ…わ、わた『し』……っ」
「シリカ、僕がいなくなっても一人で強く生きるんだ『よ』…」
「ヨレイヌ…？　ヨレイヌ！　イヤ！　逝かないでっ、ま『だ』…っ！」
「駄目だよ、泣いちゃあ。僕も、悲しくなっちゃう、『よ』…」
「ヨレイヌ――――――――ッッ！　うわあああああ『あ』！」
「――あの時、彼が言ったことを私は忘れない。私はもう泣かない。嗚呼、彼は、強くなった私のことを見てくれているだろう『か』―」
「完（かん）！」
「……終わったな、颯火！」

「ああ、感動大作だったぜ、葬屋！」
しりとり劇の終わりを手をとって喜ぶ二人。
いつの間にかしりとりの台詞で寸劇を始めていたようだ。
馬鹿か。
「俺、不覚にもシリカの台詞で少し泣きそうになったよ…」
「ああ、恋人の死を乗り越えて強く生きる女性には心打たれるものがあるよなぁ…、葬屋の気持ち、よく分かるぜー」
「シリカには幸せになってもらいたいよな」
「天国のヨレイヌもきっとそう願っているさ…」
やっぱり馬鹿だこいつら。
しかし名演技のおかげか、しみじみ感傷に浸っている彼等の周りには悪言の影は一つもなく、より正確に言うと、青々と茂っていた木々も破砕している。
「おーい、弔祇さんに悼さん！　調子は…絶好調みたいね…」
「僕達が手伝いにくる必要はなかったみたいだね。砂漠みたいになってる」
「せっかくコトも一緒に来てくれたのにー」
と、せっかくやってきた凛と琴樹も手持ちぶたさ。それに、悪言がぱったりと現れなくなってしまい、まったくにやることはない。
「……やっぱり、いつもこのタイミングでいなくなる……」
「なぁ、葬屋ぁ。もう疲れたし帰ろうぜ」
「ああ、そうだな。帰ろうか、颯火」
葬屋はそう言いながら、談笑する凛と琴樹をちらりと見た。

И

同日、夕方。
「こっとき！」
「あ、悼さん、どうかしましたか？」
栖楽歌家の隣、伊楽家の中庭で彼の武器であるアコーディオンを弾いていた琴樹に、颯火はへらへらと笑いながら声をかけた。
「いや、少し男同士で話がしたいな、とねっ！」
家を隔てる簡易な柵を飛び越えて、颯火は言った。
「正直に答えろよ？　お前、凛のことどう思ってるんだ？」
「っぅ――、唐突ですね……。どうしてですか？」
脈絡のない颯火の問いに琴樹は動揺しつつ、聞いた。
「いや、ちょっとした好奇心ってやつだな。俺とあれも幼馴染なんだけどよォ、皆あんな感じなのかなって。仲良いような悪いような」
なるほど、と琴樹はうなずくと、少し躊躇した後、
「そうですね……すごい人だとは思ってますよ。リンは誰にでも優しいし、村でトップクラスの逆言が遣えるのに全然気取ってないし…、僕とはまるで大違いです。幼馴染だから、リンがどれだけすごい人か、分かります」
「ふぅん。俺はてっきり凛の事が好きなのかと…」
「もちろん、リンのことは好きですよ。でも、それは恋愛とか、そういうのとは違うんだと思います…、憧れ、みたいなものかな…」
茜色に染まる空をぼんやりと眺めながら言った。それを見て颯火は、ありがとう参考になった、と礼を言って先ほどと同じように柵を飛び越えていった。
「……で、葬屋先生はこれで何か分かりましたか？」
「ああ、大方な」
颯火と琴樹の会話を遠くで見ていた葬屋は神妙にうなずき、言った。
「明日にはラングアゲに帰れるように準備しとけよ」

И

人間は矛盾した思いを同時に感じる。
僕は小さい頃から一緒だった彼女のことが好きだった。
でも、大きくなるにつれて、彼女が自分よりも優れているということに嫌でも気づかされてしまった。
とても、疎ましかった。
彼女と居るのは好きだったが、同時に嫌でもあった。
彼女を見ていると幸せになるが、同時に傷つくこともあった。
僕は、彼女のことを嫌いになんかなりたくないのに――ッ
捌け口のない思いを、僕はひたすらアコーディオンを弾くことで紛らわした。
その音色が、悪言を生んでいるのに気づいていながら。
増えた悪言を払うために、彼女と僕は一緒に行動した。その時間はとても心地が良かった。相反する感情なんて、気にならないくらいに。
だけど、言弾遣いがやってきてから、その時間はなくなってしまった。
彼女は手伝いに追われて、僕のことを考えてもくれない。
一緒に居てくれる時間も、短くなってしまった。
だから、僕は今日も、アコーディオンの音色に想いを乗せる。
「だからさ、もう帰っていいよ、言弾遣い」
昼間だというのにほの暗い森の中。葬屋と颯火は切り株に座った琴樹と相対してい

た。銃を構え、臨戦態勢である。
「葬屋の言ってた通り、手前が悪言の大本だったんだな」
「へぇ、気づいてたんだ？」
「悪言の増殖が止まるのは、大抵お前と栖楽歌が一緒にいる時だったからな。一週間も駆除作業を続けてれば、流石に気がつく」
葬屋の言葉に、琴樹は陰鬱に笑った。
「で、言弾遣いはどうするっていうの？　僕を殺す？」
「いや、それは言弾遣いの仕事じゃない」
「言弾遣い…、つっても見習いだけど、俺たちの仕事は悪言を退治することだ！」
「じゃあなに、僕のこのノイローゼでも治してくれるの？　やってみなよッ！」
そう言い放って、琴樹はフルートを鳴らした。透き通った音が森中に響いて、木々の陰から大量の悪言が立ち上がった。
「《チノトヒレスス》《ミノトヒエラク》……」
「来たぞ、葬屋ッ！」
「《我を汚すものは闇に散り逝け》ッ！」
琴樹の逆言を遮るように銃声が連続してはじける。悪言は次から次へと消えていくが、今までとは比べ物にならないスピードで増えていく。
「完全にエンドレスじゃねぇかよ…ッ！」
「量が多すぎるッ！」
絶え間なくなり続ける発砲音と言弾の詠唱。琴樹のフルートの破壊を試みるも、全てはじき返されてしまう。手も足も出ない。
「畜生…ッ！《闇より出でしモノは森へと帰……」
「《ジウフヲチクノソ》《クサヲラハノソ》！」
と、葬屋の言弾を遮って、高らかな琴樹の詠唱が響く。と、突然、周囲の悪言身体から無数の黒い帯が伸び、葬屋の首を締め上げた。そして、詠唱を遮られ、攻撃の出来ない葬屋に、容赦なく悪言の鋭い爪が襲い掛かった。
「っぐ……あぁ…ッッ」
「葬屋ッ！」
攻撃をしていた悪言を撃ち抜き、慌てて駆け寄る颯火。しかし、何度も攻撃を受けたらしい葬屋は立ち上がれないほどに傷を負っていた。
「手前…っ！　何やってんだよ！　馬鹿じゃねぇの！？」
「それは、こっちの台詞だ。俺にかまってないで、悪言をどうにかしろ…」
「なるわけないだろ！？　俺がどうにか戦えてんのは、手前がフォローしてくれてるからじゃねぇか！？　いつも手前で言ってることだろッ！」
「だからって、ちょっとコレはきついぜ、颯火……っ」
「なぁに、もう終わりなの？　だっさー」
気を失ってしまった葬屋を見て、琴樹はそう嘲笑した。
「何だ、アレだけの悪言をいつも倒しているから強いと思ってたけど、一人じゃ何もできないんだ？」
「うっせェな、手前を偽って生きてるような卑怯な奴に言われたかねぇよ」
「卑怯？　ふざけんなよ。上っ面を取り繕うのは当たり前だろ？　皆本音で生きてるわけじゃない。今更そんなこと言わないでほしいよ」
「ちっげぇよ。そんなことだから、手前には逆言が遣えないんだよ！」
「――――ッ！？　じゃあ、何だって言うんだよッ！」
不敵に言う颯火に、怒りに顔を歪めながら言う琴樹。
――僕の何がいけないって言うんだ！　僕はただ、彼女に好かれたいだけで…
「手前さぁ、本気で叫んだこと、ないだろ？」
「ああ、ないね」

だろうと思った、と颯火は鼻で笑った。
「知ってたか？　言霊は本当に反応するんだぜ。そこで、本当の言霊をしっかり見てるんだなァ！」
そう強く言い放って、颯火は立ち上がる。そして、大きく深呼吸をし、
叫んだ。
「《手前いつまで寝てるつもりだ眠り姫気取りかふざけんじゃねぇぞさっさとおきやがれクソスナイパーが手前は俺のバックを守るのが役割だろうがそれを手前からとったら何が残るんだよそうなったら手前はただの木偶の坊か役立たずだお前は雌だ弔祇葬屋だろだったらそんな傷ちゃっちゃと治しちまえってンだよ葬屋ァあああァあァァあああああああああッッ！》
空気が震えるほどの絶叫。息継ぎもなく感情のままに言葉を吐き出していく。
バチンッ！
叫びが終わると同時に、何かが爆ぜる音がした。すると、さきほどまで重傷を負い、立つことすらままならなかった葬屋が、軽々と立ち上がり、
「大声で叫ぶんじゃねぇよ、颯火ァアッ！」
「ぐッはぁ！」
思いっきり颯火を殴った。
その動きから、琴樹は葬屋の傷が完全に癒えているのを悟った。
「な、何で……、言弾も使ってないのに……ッッ！」
「だから、言霊だって言ってんだろ？」
殴られた頬を押さえながらという、どこか間抜けな格好で颯火は言った。
「言霊は言葉全体の力だ。本当の言葉は強い言霊を生む。心から思っていることは、強い言霊を引き寄せる。だけど、手前の言葉は本当じゃない」
「どういうことなんだよ…、意味分かんない、本当だとか、本当じゃないとか…ッ！　僕はリンに嫌われたくなくて…、好かれたくて…！」
「だからだ。お前は、《栖楽歌に好かれる自分》を演じているだけだ。ソレの言葉も自分の物じゃなく、《栖楽歌に好かれる自分》の言葉。本当の、自分自身の言葉じゃない」
所詮は他人の言葉を借りているだけ。
そんな中身のない言葉に、言霊が宿るはずがない。
「そんなこと言ったって……、じゃあ、僕は、どうしたら……！」
頭を抱えて、うずくまってしまった琴樹に二人は笑って、
「だから、本音で向き合えばいいんだって」
「猫ばっかかぶってないで、たまにはそのひん曲がった性格を表に出してみたら？」
「本音を…」
「コト！？　こんなところでなにしてんの？　言弾遣いさんまで…」
と、そこへ、まるで見計らったように凛が現れた。今までのあれやこれを見られていたかもしれないという恐怖から、目を泳がせる琴樹。
「あ、え、…えっと……」
行き場もなくさまよう視線。気がつくともうあの二人はいなかった。
――本音、本音か…
琴樹はすぅ、と決意するように息を吸った。
「リン、実は今まで悪言がたくさん出たのは僕の所為なんだ…！」
「え…、どういうこと…？」
「ぼ、僕、リンが逆言上手いから、すごく遠くに行っちゃう気がして嫌だったんだ、

すごくうらやましくて恨めしくて…、だからストレス発散にアコーディオンを弾いてたら悪言がいっぱい出てきちゃって…、やめなきゃいけないの分かってたけど、悪言を祓うために一緒に居られるのがうれしくてそれで…、だから言弾遣いとか邪魔だったから死ねばいいのにって思って…」

するすると言葉が出てきた。矛盾しているように思えた想いも、こうして言葉に出してみると、分かる。答えは一つなのだ。

「僕は、リンのことが好きなんだ！」

凛の目を見据えて、琴樹は大声で叫んだ。

「今まで色々してきたけど、全部、全部リンのことが好きだからなんだ！　他の事なんかもうどうでもいいくらいリンのことが好きだ！　だから…」

「コト、私も、コトのことが好きよ」

ふわりと、凛は花が咲いたように笑った。

「ふふ、久しぶりにコトが人の悪口を言うところを聞いた。やっぱり、コトはそうでなくっちゃ。最近妙にいい子だから、何かあったのかって心配してたのよ」

「リン…！　じゃ、じゃあ！」

「大丈夫！　私達はいつまでも**親友**よ！」

グサァッ

ふわりと、凛は聖母のような微笑をうかべた。あまりにも残酷ないい笑顔。

「もう、別にそういう毒のあるところ、ずっと一緒にいた私が嫌に思うはずないじゃない！　それがコトでじょ？　ね！」

「ああ、うん……、そうだね…」

「何か悩み事が合ったらすぐに行ってね！　ためこんだりしちゃだめだよ！　私はコトの**一番の友達**なんだからね！　**友達**の悩みならどんとこいよ！」

無邪気な言霊が琴樹に突き刺さる。

――ああ、本音の言霊って、痛いな…

琴樹は涙ぐみながらそう思って、にこりと笑って見せた。

しかし、リンの本物の笑顔の方がやはり輝いていた。

笑顔が、眩しい。

И

「一件落着！」

「おつかれ！」

ハイタッチを交わし、森の中を行く葬屋と颯火。

「でもよォ、何も言わず出てきちゃって良かったわけ？」

「いいだろうよ。大本は絶ったんだし、俺たちは用済みだろう。それに…」

「幼馴染水入らずに…、ってことか」

ニヤニヤ笑いながら言う颯火に、葬屋は無言でうなずいて見せた。

「俺達も幼馴染同士、仲良くラングアゲを目指しますか」

「ああ、そうだな」

「《これからもよろしくな、葬屋》！」

「《こちらこそよろしくな、颯火》！」

「《相棒》！」

「《親友》！」

そう言って、二人は顔を見合わせて笑った。

その数分後、すぐに罵倒の応酬が始まったのは言うまでもない。

《NEXT STORY…》